

---

# てのひら

雨式藍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
てのひら

【Nコード】  
N8123S

【作者名】  
雨式藍

【あらすじ】  
書いた掌編、短編小説をUPしていきます。

雨の日（前書き）

6月5日改稿

## 雨の日

教室の窓から、枠に囲まれた世界を見ていた。頬をなでる風は生暖かく、湿っていた。

朝からテレビで、梅雨に入ったのどうのこうのとアナウンサーが喋っていた。

雨は、嫌いだ。

友達とけんかをした。

地面がぐしゃぐしゃで、運動場に出られなかったからこうなったんだと、ため息混じりに呟いてみる。

「中野くん？」

同じ班の女子が、俺の顔を覗き込んで不思議そうにしていた。

「どしたの？ 元気ないね」

俺が手に持っているほうきに目を落とされた。俺は彼女に背を向けた。あいつがいないと、することが無いので掃除をするしかない。「お前は嬉しいんじゃないの？」

いつも俺と友達掃除の時間にほうきでちゃんばらをして遊んでいる。彼女の役目は遊んでいる俺たちを注意することだった。

「ちよっとね」

くすりと笑われた。

「んだよ」

彼女は手に持っていたバケツを床に置いて、しゃがみこみ、雑巾を水に浸した。

きもちい、と笑顔を俺に向ける。最近湿度と気温で室内はむんむんしている。冷たい水はさぞ気持ちのいいことだろう。俺も雑巾にすればよかったかなと、少しだけ後悔した。

「高崎くん、大丈夫かな？」

高崎 俺の友達はピロティで滑ってあごを打ち、切ってしまった。原因は俺だと、高崎は俺をにらみつけながら病院へ連れられていった。俺に悪いところがないと言い切れるわけじゃない。俺にも悪かったところはあった。でも、高崎がまったく悪くなかったわけじゃない。あいつにも悪かったところはあったはずなのに。

あいつは教師に俺が全て悪いんだと話して消えやがった。俺は一人で教師の拳骨を食らった。

別に拳骨を食らったからムカついてるわけじゃない。

俺は、あいつが俺に何もかも押し付けて逃げやがったことに腹が立っていた。

友達なら、痛みや苦しみを分かち合いながら生きていくはずなのに。

教師の説教も二人で聞かなきゃいけないはずなのに、あいつは。

「高崎なんて、どうでもいいよ。南は、そんなに高崎のことが好きか？」

すこし彼女 南をからかってみた。

南は唇をひん曲げて、頬を膨らませた。

「あんた、まだ怒ってるの？ それに、あたしはクラスメートだから心配してるだけよ」

水に浸した雑巾を固く絞り、南は床に置いた。

俺は小さく拳を握ってうつむいた。

「別に……」

\*

\*

\*

下校のチャイムが鳴ってもなんとなく帰る気になれず、しばらく一人で本を読んでいた。

「中野お、先帰るぞ」という声が聞こえた気がしたので、適当に返事を返す。

しばらくぼうつと、文庫本の文字を眼で追う。

気がつくと、教室の時計は五時を指していた。部活動の時間だ。でも俺はとて部室に向かう気にはなれず、学生鞆をつかんで立ち上がった。

玄関に着くと、傘はひとつも無かった。俺は傘を持ってきたはずだったのに。

誰かとつていきやがったな。

舌打ちして玄関のドアを押した。雨はひどくなっていた。

学生鞆を頭の上に乗せて、駆け出した。俺の学生服はぐしゃぐしゃになって、体にぴったりと張り付いてくる。

俺の家は高崎の家の三軒先である。つい高崎の家の前で足が止まってしまった。心の奥底に沈んでいるもやもやした気持ちをここで払ってしまおう。そう思って、心の中で言葉を考えてから、高崎の家へと足を踏み出した。

玄関のインターフォンを鳴らすと、顎に白いガーゼを当てた高崎が、むすつとした顔で出てきた。

ごめん、と口を開きかけたけれども、その言葉は俺の喉の奥でつかえて出てこなかった。

「何？」

見下すような視線を高崎は俺に投げた。

何だよ……お前、俺んちに電話かけたの謝るためじゃなかったのかよ。出かけた言葉を必死に押し殺して、唇を無理やり違う形に動かそうとした。

「お前、何で俺に罪を押し付けて逃げやがった」

しかし、上手いかなかった。なんだか夢でも見ているように体がふわふわして、頭がぼうつとして、口が上手く動かせない。勝手に違う言葉を紡いでしまう。

高崎の制服の袖にはまだ、少し血がついていた。俺がつけてしまった、血。

謝ればいいのだ、一言だけ、「ごめんなさい」と。でも、素直な気持ちになれない。胸の奥にもやもやした霧のようなものがわだかまっているせいだろうか。

「なんだよ。怪我させたんだから、そのくらい当然だろ」

そして、その言葉にいらついて、高崎の襟首をつかみそうになった。体は必死に押さえたが、口のほうは言うことをきかない。

「誘ったのはお前だろ!？」

ピロティで無様に転んだ高崎を思い出す。俺が悪いところもあった。ふざけて足をかけてしまったから。でも。

「俺だけが悪いわけじゃない」

高崎は目を眇めて俺のことを見下した。やっぱだめだ。仲直りしようとしてきたけれど、全然できそうに無い。

「いつも、一緒に怒られてたじゃねえかよ!! 何で今回だけ裏切るんだよ。マジ信じらんねえ! ありえねえし」

喉の奥から信じられないほど大きな声が出た。それを高崎は静かな声で返した。

「謝りにきたんじゃないなら帰れよ」

俺は、何しに来たんだよ。

頭の中では分かっているはずなのに、心がそうさせてくれない。怪我させて、ごめん。今度から気をつけるから、また、遊ぼう。考えてひねりだした言葉は、使われることは無かった。

\*

\*

\*

家に帰るとだぼだぼのジャージを着た姉貴が、ソファーに座ってテレビを見ていた。俺に気づくと、自分の隣に置いてあったタオルを放つてよこした。

「なに、その不景気面」

「別に」

姉貴は濡れた頭にタオルを被って、自分のびしょぬれの制服を拭いていた。心なしか不機嫌なのは、自分が濡れたからだだろう。

「今日の夜何にする？」

ぶつきらぼうに訊いてきた。いつもなら何か答えるところだが、今日はそんな気分ではなかったので無視する。

「あんたの嫌いな人参たつぷり入れてやろうか？」

皮肉たつぷりにその言葉を口にして、姉貴は俺の顔を覗き込んだ。  
「なによ。あたしの手料理も明日から四日間食べられないのよ？  
さみしくないの？」

姉貴は明日から中国へ修学旅行に行く。俺たち姉弟は二人暮らしだ。父親がいることはいるのだが、あちこちに転勤する職業柄、決まった場所にいることができない。俺たちにとって転校はできるだけ少ないほうがいい。そういうわけで俺たちだけ、この土地に残っている。

だから、時々仕送りを送ってくれるのだが、生活は基本二人で何とかする。家事も二人で分担して行っている。

「せつかくさあ、修学旅行前日で早く帰って来れたつうの……スカートのひだがとれちゃうじゃない」

ぶつぶつと文句を言いながらプリーツスカートのひだを直している姉貴のことは放っておいて、居間のテーブルの上のきゅうすを手に取り、給湯器のスイッチを入れた。

お湯をきゅうすに注ぐ。ほんわりとした湯気が立った。

出がらしとなった茶っ葉がきゅうすの中で浮き、お湯が薄緑色に染まる。その様子をぼんやりと眺めていると、唐突に姉貴が話しかけてきた。

「高崎君から電話、さつきかかってきた」

高崎。

「用件は？」

自然と声が冷たくなる。姉貴は頭にかけたフェイスタオルの下か



ら、俺を怪訝そうに見つめた。

「あんたが居ないって言ったら切っちゃったけど。ひょっとしてあんたら、喧嘩した？」

俺のぶっきらぼうな態度を見てか、それとも高崎の態度が分かりやすかったのか。それは分からないが、こういうとき姉貴は鋭い。

「あのさあ、喧嘩するのはいいけどさ、何で？」

怪我させた、とぼそりと返すと、姉貴は苦笑を浮かべた。

そんなことで、とあきれ果てるような表情だ。

「あんたたち、ちっちゃいのよ。あんたが帰ってくる前に電話かかってきたから、あ、一緒に帰ってこなかったんだな、って思ったら」「あいつが全部俺に押し付けたんだよ。先公に何もかも俺のせいだ、って言いつけやがって。友達なら一緒にしかられるべきだと思うだろ？」

お茶を一口すすった。姉貴はテレビの音量を下げた。

「どうせ、遊んでて怪我したんでしょ？」

馬鹿にするような口調で言われてカッとした。

「俺裏切られたんだぞ！」

姉貴はスカートをぱんぱん、とはたいてハンガーにかけた。スカートをかけたときにジャージの袖から手首が見えた。もう半袖を着ることができないようになってしまった手首。

「裏切られた？ あんた、そんだけで裏切られたなんて思うほど高崎君とは浅い関係だったわけ？ それとも幼馴染だからなんとなく付き合ってただけ？」

姉貴はじつと俺をにらみ上げた。友達の話になると、姉貴の一言は、重い。姉貴は、中学のころ、いじめられていた。でも、一度も登校拒否にはならなかった。そばに、たった一人だけだったけれども、信頼できる人が居たからだった。

その人とは今でも仲がよく、親友、と呼び合う仲になっている。

「人付き合いって、授業では教えてくれないし、ホントに難しいと思う。あたしもどうしたらいいかわからないこともあるし。答えは

分からないまんま。だけど」

姉貴は言葉を継ぐとしたがそれは俺の言葉にさえぎられた。

「何だよ、こういうときだけ姉貴面しやがって。何にもわかんないくせに」

俺は、唇をかんだ。

自分でも分からない。どうしてこんなことで喧嘩して、一人でイライラしてるんだろう。

「友達つて、一体何なんだろうね」

唐突にいわれて、どきん、とした。

「姉貴は、どう思うの？」

それは、中学のときの姉貴が、必死に悩んだことだった。姉貴は中学の女子たちと上手くなじめなかった。もともと人付き合いが上手いほうじゃなかった。人見知りが激しくて、初対面の人と上手く話せなかったらしい。それが、原因だった。

仲のいい友達と、あまり親しくない友達への態度の差は、やがて女子たちから批判されるようになる。「中野さんってさ、人によって態度かえるよね。ありえないし」

実際、姉貴の態度は大分違っていたらしい。本人もそれを自覚していた。でも、どうしても直せなかった。姉貴は、その女子たちの言葉を聞いて、人と話すことが怖くなった。

そして、ろくに相手の顔も見えて話せなくなり、いつしか、女子の中心だった一人から散々言われるようになった。

その波はだんだん広がって、いじめになった。誰もとめようとしなかったという。姉貴は一人になって、孤独になって、苦しくて。

それでも、たった一人の支え、友達を見つけた。

「そばに居てくれるだけでほっとする人、かな」

一人つてさびしいんだよ。と、小さく頷いた。

「あんたは、中学でたくさん友達居て、楽しそうで、いいな」  
たくさんなんか居ない、俺にも、

一人しか居ないんだ。

「一人一人で友達に対する考え方っていろいろあると思う」

姉貴は静かに言った。

俺にとつての友達って何なんだろう。

ただ遊ぶだけの友達だったわけじゃないはずなのに。喧嘩をして、崩れてしまうほど悪い関係じゃないはずだったのに、もう崩れてしまいそうだ。

「お互いの気持ちをぶつけ合えるって、すごくいいことだと思うよ、すごく胸が痛い。喉の奥が熱い。」

「それだけ、一緒に居て、自然に接することができるってことじゃない」

そんなの慰めでしかない。もし、崩れてしまったら俺、他に誰もいない。一人だ。

「俺、謝りたかったのに、あいつの顔見ると、なんかイライラしちゃってさ……」

そんなことをぼそりとつぶやくと、ふうん、と姉貴は俺のほうを見上げた。

「喧嘩ってさ、ただの意地の張り合いみたいなもんだよね」

姉貴はソファアの上に足を上げて腕で抱き、ひざの上に顎を乗せた。

「本当は二人とも仲直りしたいんだよ」

その言葉はすんと、と胸の中に落ちていった。

「高崎君……」

高崎がかけた電話。一体あいつはなんと言ったのだろう。どんな顔でかけたのだろう。

怒っているのだろうか。

本当は、怪我させたとか、教師にチクったとかどうでもよくて、俺は、あいつと仲直りしたい。

「ちよっと、寂しそうだった」

寂しい　そうか寂しい、そうかもしれない。

俺の広く浅くの付き合いの中で唯一高崎だけとは、付き合いが長くて深くて、お互いの顔色を気にすることが無く、遠慮なく話せる付き合いだった。いつも悪さしたときには一緒に怒られて、説教が終わった後に先生の顔が変だったとか、笑い飛ばして。

その高崎が、俺の相棒だった高崎が急にそばから離れて、俺一人をいけにえに逃げて、俺は、隣に居るあいつが居ないことが寂しかったんだ。

そのとき、電話が鳴った。俺はしがみつくようにして受話器をとって、耳に当てた。

『中野？』

受話器の向こうの声を聞いたとき、俺の口は自然とある言葉を口にした。

『ごめん』

声が重なった瞬間、口元が緩むのを抑え切れなかった。姉貴は俺に二本指を立てて、Vサインをつくって見せてくれた。俺は笑って左手でVサインを返した。

窓から少しだけ見えた空には、うつすらと虹が架かっていた。

## チューリップとサクラ

真っ白な桜の花が校門脇の木々の枝とともに揺れている。

本来なら一年前に見る筈だった景色をぼんやりと眺めながら唇を噛んだ。

周りにいる一年生はみなすべて俺よりも年下になる。みな不安そうに、だが幸せそうに、学校の中へと入って行った。俺はなかなか入れないままだった。すぽすぽ抜ける、前を歩いていくローファアの踵に目を落としたとき、後ろから声がかかった。

「あれ……、中野？」

声のほうを振りかえると膝上の丈でスカートを履いた少女が立っていた。

自然とまた視線が落ちる。そしてその先で見た、一年間履かれていたのであるう、少し傷がついて、少し糸がほつれかけたローファアが目に痛かった。

「佐倉……」

「久しぶりだね」

大きな黒々とした瞳を最大限に細めた、満面の笑みだった。黒髪はさらさらで、滝のように肩に流れ落ちる。

「一年離れたんだよね」

背負っていた鞆に指をかけて、「うん」と少女は頷いた。

「髪、切っちゃったんだねー、別人みたい。でも前のほうがうちのにはタイプかなー」

歌うように言って少女は学校に向かって歩き出す。

お前のタイプとかどうでもいいから。

俺と佐倉はただの幼馴染で、それ以上にもそれ以下にもなる気配がない。

「新しい生活の始まりですよ」

反駁しようとしていたがそのふざけた声を聞いて一気に萎える。

下足箱まで歩いて行って一年の差を思い知る。靴箱の場所が違うのだ。佐倉は「じゃね」と軽く手を振ってくれたが振り返す気にもなれない。

どうやって自分が一つ年上であることをごまかそうかと一つ溜息を。

溜息を吐くと幸せが逃げていくらしいが、そんなことを考える前に出てしまうのが溜息なのだからしょうがない。

バレてしまえばやはり奇異な目で見られるだろう。そんなことはできるだけ避けたいと思っている。

平和に解決したい。

だが。

「このクラスの中野亮介君は、一つ上の先輩だが、決して特別扱いをしないように」

ケツ顎の担任はその割れた顎をさすりながら、非常によく響く声で言った。

おそらく居心地悪そうにしていた俺に対する気遣いなのだろうが、俺にとってはそんなものの迷惑でしかない。

放っておいてほしい。

その瞬間クラス内でざわめきが波紋のように広がり、そしてあたりを見渡し始め、最終的に俺に視線が集中した。

視線が痛くて俯いた俺に担任は歩み寄ってきて、大きな手で背中をバンバン叩くものだからたまらない。

「中野はなー偉いんだ、親御さんが」

「ちよつとストップ」

近くにいた担任を手で制して睨みあげた。

「個人情報をもやみやたらと漏らさないでください」

「そんな顔するなよ……」そしてまた手が来た。別に痛くはないが非常に煩わしい。

でもここで何か言えば本当に浮いた存在になってしまいそうなの

で我慢、我慢する。

「そついうわけでこれからよろしく頼む。さて、入学式の会場へ移動しろ。迅速にな」

入学式にはローファーで出なければいけないことになっている。

俺のローファーは一年前に履くはずだったもので、少々大きくなった俺の足には少し窮屈だった。吹奏楽部の演奏と盛大な拍手で入場するが、苦痛でしかない。

隣の女子がちらちらと俺を見る。俺が視線を投げると目を反らすか伏せる。

もし担任が何も言わなければ普通に接してくれていたのだろうか。俺が学校に通えるのが一年遅れたのは俺の母が体調を崩したからだ。俺は母と二人暮らしで何もかも母が養ってくれていたので、母が病に臥せてからはお金がなくなった。俺が働かなくてはいけない状態になった。それが丁度、俺の公立高校の受験が終わった一日後だ。だから実は、中学の卒業式にも出ることができなかった。

必死に俺を応援してくれていた母は、大分疲れていたのかもしれない。

きつと気が抜けてしまったのだろう。人は、気が抜けたときに体調を崩しやすい。

俺は働き始めたが、中学生が働くといっても限界がある。バイトを一日中しなくてはいけないような状況で、学費はもちろん足りない。

だから高校に通うことができなかった。

「中野はどうしてまた学校に通おうと思ったの？」

そんな質問が佐倉からメールで送られてきたことがある。

「学校に通って、そんでいっぱい勉強して、医者になりたいと思っただんだ」

母が病気になったとき、俺は本当に何もできなかった。ただ、お

金を稼いで入院費を支払うことくらいしか。

無力だった。情けなかった。

医者は医学という学問の力を使って人を救うことができる。そんな力を手に入れたいと思って、もう一度高校に進学することに決めた。

校長の長い、そしてありがたいのである言葉聞き流し、俺はこのまずい状況をどうすべきか考えていた。

一学年違うとなると、近寄りがなくなるだろう。しかも、俺はあまり人相のよいほうではない。

入学式が終わった後の学級活動の時間も、俺はどこか上の空だった。

休み時間にはお互い話し掛け合って盛り上がっている奴らもいた。一方、俺は居心地が悪くて、人と目を合わせたくなくて本を広げてひたすら字を目で追っていた。

そうしているうちに、だんだんまとまりつつあるクラスの中で、俺は一人、取り残されていた。

帰りに下足箱まで行くと、見覚えのある顔の人物が立っていた。

「やつほ、やつぱ一人になったか」

佐倉はローファーを取ろうとする俺を通せんぼする形で顔を覗き込んできた。少し不機嫌そうに見えるように顔を歪めると、佐倉は唇を尖らせた。

「中野は昔っからそんな感じだからね、きっと友達なんて作れないとは思ってたけど」

「別に作りたくないわけじゃないさ。俺だって友達は欲しいと思ってるけど、誰も寄り付いてこないから」

本当に誰も寄り付いてこないと思ってるの、と息を吐き、佐倉はあきれ果てた様子になる。

「あんたさ……誰かに来てもらえるような努力をしたの？  
そんなむすつとした顔じゃ誰も来ないでしょうも。」



人を避けるように、目を逸らすのもやめたら？」

それ、に、と指を突きつけながら、佐倉は続ける。

「受身だからいつまでたつてもできないんだよ。もつと積極的にならなきゃ。黙ってて友達できるなんてどんな奴？ 全く……一学年上だから気にしてるわけ？ そんなの関係ないじゃん」

佐倉は怒ったように眉を吊り上げて、ふてくされたような顔で俺に何かを差し出した。

思わず身を引いた俺に「なんて奴」とまた溜息を漏らし、もう一度それを突き出した。

「亮ちゃん、チューリップ」

久々の「亮ちゃん」に少し戸惑う。

「これね、卒業式で最後にもらった花。あんたは貰えなかったでしょ？ 今日お母さんから預かったの。渡すタイミングなくって今になっちゃったけどね、貰って。お礼はお母さんに言ってね」

桃色のふつくらとした花びらを持つチューリップ。

俺は綺麗に包装された一輪の花を佐倉から受け取った。

「今日一日持つててさ、亮ちゃんってチューリップの花に似てるなっと思っただの」

俺が、チューリップの花に？

「他のみんなを桜にたとえたら、亮ちゃんはチューリップだよ。友達がたくさんいる桜は群れて咲く花。一方、チューリップは一つに少ししか咲けない花。どっちも綺麗な花だけど、チューリップは一人では仲間を増やすことすらできない、寂しい花なの。亮ちゃんはチューリップだから、きつと人の手を借りないと仲間が作れないんだね。」

まあ、今回は状況も状況だけどね」

「ほっといてくれよ」

首を振った俺に佐倉は少し考えてから返した。

「あたしがチューリップを仲間と引き合わせる人の手になってあげ

ましようぞ」

ふざけたような口調だった。だが佐倉らしい。

俺が何と答えたらいいか分からず黙っていたら、佐倉は俺に道を譲った。靴を履き替え外に出る。

「人付き合いに消極的なのはもうやめるよ」

チューリップもチューリップなりの努力をしなければいけないと思った。

チューリップの花は人の手によって群れ、そして楽しそうに風に揺れる。

佐倉は手になると言ったが、この優しい幼馴染にあまり迷惑をかけるわけにもいかない。

桜の花が風に揺れている。

俺は桜にはなれない。でも、チューリップなりの友達を探す。

## 春と風

春の陽気は眠くなる。

先ほど身体が揺すられた気がしたが、あまき天木は重い瞼を重力に逆  
らわずそのまま閉じさせて、睡眠を続行した。

その瞬間、後ろから肩に手が乗る。どうやら気のせいではなかつたようだ。

「天木さん、そろそろ行かないと、巡回の時間ですよ」

「まだもう少し……」

くぐもった声で返事をする、額に冷たい手がかけられた。

「ひゃ、つめた……うぁッ！」

小さいくせに硬い拳が振ってきて、天木は跳ね起きた。

「何するんですか！ 痛いなぁもう」

天木が見上げたその人物は藍色の上着に藍色のタイトスカートを身に着けていた。煽るような状態で見る彼女の顔は美しいがそれよりも恐ろしさのほうに勝っている。

女は唇を吊り上げて凄絶な笑みを浮かべ、天木を見下ろした。

「人がさつきから優しく起こしてあげてるのに、あなたはいつまでも『まだ』『もう少し』を繰り返すんですもの。こっちだって仕事があるんです。それなのにあなたはさつきから寝てばかりで、私の手を煩わせた挙句、時間過ぎても巡回に行かないと。ふざけるなよこの野郎」

女は天木のこめかみを指でがっちり挟み、脅すように押した。元は整った目鼻立ちをした女の顔が怒りで歪む。

「それはおそらく寝ぼけてただけです。僕は覚えてませんからね！  
！ それにほら、あなた女性なんだから、汚い言葉遣いとか、そういう顔とかやめましょうよ。せつかくの美人さんが。損しますって絶対」

天木は情けなくおどおどしながら言葉を並べる。が、女のほうは

全く聞く耳を持たない。

「いいから早く行け馬鹿ッ！！」

天木は先ほどの一方的な暴力により乱れた藍色の制服を直しながら追い出されるようにして街へ出た。

天木はこの街の交番勤務の警察官だ。

「まったくもう、間中<sup>まなか</sup>さんは……もったいない人だなアもう」

先ほどの女 間中も同じく警察官だ。

天木は生暖かい風を受けながら巡回のルートを辿り始める。今日はどうやら少し風が強いようだ。そろそろ散る頃になっていた桜の花が風に舞い上げられ、踊っている。

この街は小さいがとても賑やかで、綺麗な街である。道路、公園などは地域住民のボランティアが掃除をしてくれているし、花も植えられていて華やかだ。わりと最近できた新しい街なので、公共施設や住宅などの建物はまだ綺麗でもあるし。なんと言っても、この街の人間は生き生きしていると思う。そんな中にいられることが、天木のささやかな幸せでもあった。

「おはようございます！！」

「ああ、おはようございます」

巡回コースの一部である公園に差し掛かったところで小学一、二年くらいの男の子に声をかけられた。彼は「おまわりさん」に憧れているらしく、天木に話しかけてくることが時々あるので顔は知っている。名前は訊いたことがないが。

その彼は、この公園の巡回らしきものをしていていたらしく、得意げに胸を反らせて「異常はありません」と敬礼した。

天木は苦笑しながら男の子の手を取って降ろす。

「敬礼はね、帽子を被ってないときはしないんですよ。帽子を被ってないときはこう」

天木は男の子の背を押して前に倒した。いわゆる普通のお辞儀と同じ格好である。

「えー、そうなの？　じゃあ俺今度、帽子被ってここ見回るね、敬礼のほうがかっこいいもん。天木さんいつもこの時間にここ来るの？」

天木は微笑を浮かべて小さく頷いた。

「いつもとは限らないけどね、まあ大体このくらいかな。毎日僕が来るわけでもないし」

「天木さんの他に来る人って、間中さんでしょ！！　あの人綺麗だよね！　天木さんあの人と付き合ってるの？」

「そんな言葉どこで覚えたのかな、僕いくつ？」という脅しを含む返答をしてやろうかと心の奥底で思ったものの、そんなことをしたら天木の沽券に関わる。やめておいた。警察官の中には天木に惚れ込んでいる輩がたくさんいる。男ばかりの職業のせいもあるのだろう。天木は他の男たちから代わって欲しいとせがまれることがあるが、こればかりはどうしようもない。

そんな風に人気のある間中が美しいのはその通りだが、間中と天木は釣り合わない。どう考えても無理だろう。

というよりも、天木はあの恐ろしい性格を我慢できそうにない。結婚はまだしていないが、結婚するならおしとやかな女性とがいいと思っている。

「付き合ってなんかないよ、ただの仕事仲間だから」

「えーつまんないの」

天木は「じゃあね」と軽く手を振ってから歩き出した。

スーパーマーケット前に差し掛かったとき、白髪で腰が曲がった女性が嗚咽を漏らしながら地面に覆いかぶさるようになして何かを探しているのが目に留まった。女の周りには鞆の中身が散らばっている。

「ちょっと、奥さん何してるんですか！」

駆け寄って女の身体を抱き起こしてみると、彼女の顔は蒼白で、目は潤んでいた。

「財布が……財布がなくなってもうたんです」

「どこあたりでなくしたか覚えてらっしゃいますか？」

彼女は震える唇を開きかけて閉じ、そしてもう一度開いて声を絞り出した。

「買い物をした後なんです。多分……」

「いくらくらい入っていたか覚えてらっしゃいますか？」

「二千円丁度です……おつりとレシートはここにありますが」

女は手を開いた。そこには確かにつり銭とレシートが乗っている。

天木はズボンのポケットからメモ帳とペンを取り出して素早く書き留めた。

「どんな財布ですか？ 色やデザインなど分かりますか？」

「茶封筒に入れてきておりました。最近私はボケが激しくって、財布を持つていたらどっかに置いてきちゃうからと封筒にお金を一日分詰めてもらっておいて持つてきて買い物をするんです。今日はまだ回るところがあつたのに……」

天木は『財布』という文字に二重線をペンで引いて消し、茶封筒と書き直した。

「とりあえずこの辺りを探してみましよう、無ければ交番まで来てください。紛失届け、場合によっては盗難届けを出していただく必要があります」

女が頷いたのを確認してから、天木は自分も封筒を探そうと思い、女を座らせて立ち上がった。

そのとき、

「あの人が盗みました、覚えてます！ あの人の、ずっとあたしの後ろについてきてました……」

スーパ―から出てきた男を指差して女が叫んだ。その叫びに気づいたのか、出てきた男はこちらを向いた。

そして、天木と数秒目が合って 逃げるように駆け出した。  
「すいません、少しお訊きしたいことが」

天木は声音はそのまま男に向かって走り出した。

幸運なことに、男が逃げ出した方は行き止まりになっている。この辺の地理に疎い人間なのか。それは分からないが、ツイている。

天木の予想通り、男は怯えた顔で戻ってきた。天木は足を止める。両腕には野菜類、カップラーメンなどの商品が裸の状態で抱えられている。が、何を思ったのか、天木から二、三メートルのところまで商品を全て放り投げ、ポケットに手をつ突っ込んだ。そして抜き出した。

何を　？　鈍い光を放つ小型のナイフをだ。

「おらあああああッ！！！！」

ナイフが迫ってくる。だが、天木は退かない。ここで退けば、代わりに誰かが刺される危険性があるからだ。

天木は、男のナイフが自分に届く十分な距離になってから、飛び出しているナイフを持つ男の手首を手刀でぶったいた。ナイフが落ちたのを確認する間もなく、男の右足に自分の右足を掛ける。襟首を引っつかみ自分にひきつけ、左足を軸にして回転。男を地面に引き倒した。

自分の足元に倒れて呻いている男に、天木は変わらない明るい声色で言った。

「署までご同行願えますか？」

携帯から電話をかけ、間中が出た。交番は間中に任せ、交番の奥のほうで仮眠をとっていた男を呼んで、逮捕した男を署まで連れて行ってもらった。天木は女と一緒にお金の入った茶封筒を探したが、店の周りでは見つからず、男が盗んだものの中にも入っていなかった。なので、女に交番まで来てもらうことにした。

交番に戻ると、表向きの明るい顔をした間中が女を迎えた。とりあえず紛失届けを書いてもらうことにして、椅子に座らせた後、天木は二階にある奥の部屋に入り、ふう、と息を吐いた。間中の明るく優しい声が聞こえてくる。女というものはほころぶ表情を変えて、恐ろしい。そんなことを思いながらお茶でも飲もうと思ってポ

ツットのボタンを押していると、なにやら大きな音がした。いつもはこのような音はしないので、何だろうと思って、窓を開けて外に身を乗り出した。原因はすぐ分かった。鬱蒼と茂った木の枝が窓を叩いていたのだ。風が強いので、普段は届かないはずの枝がここまで届いている。

今日は風が強い。

「もしかして」

天木は先ほど取ったメモを取り出し、眺める。封筒の中には軽いものしか入っていない。

飛ばされたのかもしれない。

いや、飛ばされなければおかしい。鞆の中身は道路に広げられていた。万引き現行犯で逮捕された男は、女の金を盗んだかという問いを否定した。それを女は疑り深く眺めていたが。もし、鞆の中にまだ金があったのに無いと思って鞆の中身を広げてしまったとしたら。

天木は階段を駆け下りて、スーパーへ向かった。あの付近の木にもしかしたら封筒が挟まっているかもしれない。

そして、その読みは当たった。

街路樹に突き刺さっている。「すいません、はしごありますか」スーパーの店員に訊ねてはしごを借りたが、あまり上等ではなく、風が強くて揺れ、使い物にならなかったので、結局木に登って封筒を取った。

封筒の中にはきちんと二千円が収まっていた。天木ははしごを返して急いで交番に戻った。

「奥さんッ！！ 見つかりましたよ」

間中の訝しげな視線を無視し、交番に入るなり、天木は女に茶封筒を差し出した。女はきょとんとした顔でこちらを見上げている。

天木はにっこりと笑って説明した。

「犯人は風でした」



「風……？」

天木は親指を立てて、自分の後ろ　外を示した。

「この今日の強い風ですよ。封筒を風が奪っていったんです。奥さんがお金が無いと思って鞆を広げたときまで、実はお金はあって、中　身を外に出したときに風に攫われていつてしまったんですよ」

「つまり、春一番が、お金を欲しがってたってことですかね？」

その言い草に少し頬を緩めて、「そうかもしれないですね」と返答。

「でも奥さん、春一番は2月から3月あたりに吹く風のことですよ。だから、そうですね……今日の風は春二番、いや、春三番あたりにしておきましょう」

ありがとう、と軽く頭を下げ、笑いながら女はお金を受け取り、交番を後にした。

すがすがしい気持ちで女を見送って、振り返ると、間中がむくれた顔で天木を睨みつけていた。

「な、なんででしょうか？」

かなり不機嫌そうな顔だ。もう嫌になってくる。逃げ腰で二階に上がろうとした天木に間中は、

「その解き明かし顔がム力つくんです。偉そうに。いつからそんなに偉くなったんですか」

「なるほど。僕が小さな事件を解決できたことをねたんでるんですね」

「うるさいッ！！　馬鹿の癖にッ！！」

「悔しいんですね」

煽るように言った天木の言葉のあとに、拳と蹴りの嵐がきた。

ああ、今日は本当に風が強い。

## 緑と空（前書き）

全然お題タイトルに沿っていませんのでそこは気にせずに読んでください…。

## 緑と空

誰かに向けて、何かを書くときは、赤いペンで書いたらだめよ。

私は友達に向けて手紙を書いていた。赤ボールペンを握ったまま顔を上げた私に母は諭すように言った。

赤は、絶交の色。

そしたら青はだめなの？ と訊ねる私に、青は悲しみの色だと教えてくれた。

そしたら緑は？ 緑は別れの色だよ。

黄色は、と訊いた所で母は表情を曇らせ、困った顔になって、知らない、と答えた。

それは、今となっても真偽の判断がつかないことだ。どうしても訊かれたらこう答える。クラスのメンバー全員で先生に、旅立っていく誰かに色紙を書こうとするとき、皆はそれぞれからフルな色ペンを手に持って色紙を囲む。そうして出来上がった色紙には当然色とりどりの鮮やかな文字が並ぶ。それをもらって喜んでいる、それに自分がもらったときに嬉しい。だから、なぜそんな色で書いてはいけないのかと疑問に思ってしまう。

母はただ単に色ペンで手紙を書くなということと言いたかっただけだったのかもしれない。でも私の心にはその言葉がしっかりと染み込んでいて、それを信じてずっと手紙の宛名も、本文も黒の筆記用具を使って書いていた。色紙を書くときには、何で黒？ という冷やかな目で見られていたけれど。

その私が、つい最近、赤いボールペンで手紙を書いた。色がどうのこのの、とかいう問題ではなく、内容が内容で、受け取った相手をなじるようなものだったからだと思う。相手は私の友達だったが、

私と口をきかなくなってしまった。彼女は明日、引越しをする。昨日は、彼女の家でお別れパーティーが開かれたらしい。もともとは行くつもりだったが、私はつまらない意地を張って、行かなかった。教室では昨日彼女の家に行ったメンバーが彼女の机を囲んで、甲高い声で笑いながら騒々しいお喋りをしている。彼女はその真ん中で笑っている。私は机の上に乗せた腕に顎を押し付けて、その様子をぼんやりと眺めていた。机の心地よい冷たさを感じながら息を吐く。目を眇めてじっとしていたせいだろう。彼女を囲んでいたグループの一人が、こちらに気づいて「わ、梨奈こわ〜い」と声を上げた。とたんにみんなこちらを振り返ってどっと笑い声を上げた。私は少し頬を緩ませかけたが、仏頂面で真ん中に座っている彼女を見て、表情を引き締めた。

「ねー何で梨奈来なかったの？」

こつちに訊いてくる一人の女子に、

「ごめん、昨日急用がでちゃって……さ。行きたかったんだけど、ごめんね〜」

へらつと笑って返した。我ながら気持ちの悪い笑みだったと思う。

ああ……最悪。

「そつかあ、真理奈、昨日は楽しかったよねえ」

引越しをする少女、真理奈のほうに向き直って屈託なく笑う彼女に悪気はない。そういう子なのだ。分かっている。でも今の私の心にはちくちく刺さる。草むらを歩いていくと時々あつて足にまわりついてくるような棘のついた植物のように、鬱陶しい。

歪んだ表情を見せたくなくて、私は突っ伏した。喧嘩した原因は自分でも信じられないことだった。今まではあの子の嫌な部分まで全部ひっくるめて大好きで、親友だったのに、私はあの子の少し煩わしい癖が嫌になって手紙に「やめてくれる？」と書き連ねた。煩わしい癖、あの子は喋り方が少しぶりっ子っぽくなるところがある。それはわざとではないと分かっている。それから、書き物をしていると、書いている内容が自然と口に出てきて、うるさい。一緒に勉

強していると煩わしい。それから、

そんなことを全て手紙の中に赤ボールペンで並べた。絶対傷ついた。だって真理奈はもらって広げたときに傷ついたような顔を、したから。

どうしてか分からない。勢いで書いてしまった。どうしてあんな気持ちになったんだろう。どうしてこんなときに。どうして私は意地を張ってるの。仲直りしたいよ。でも今更元の状態に戻ることもな。できない。できない。でもしたい。じゃあやってみればいい。無理だよ。だって怖いんだもん。あの子になんて言われるか。優しい真理奈に何て言われるか分かんないから。何か言われて、立ち直れなかったら怖いから。

さよならって言いたいのに。

そしたら言えればいい。でも言えないでしょ私は臆病者。

時間が戻ったら。

時間が戻るなんてことはなく、止まるなんてこともなく、真理奈の引越しの日が来た。

青色の絵の具を絵筆で延ばしたかのような真つ青な空になぜか苛しくて、私は学校から出された課題も手につかず、鉛筆を次々に折っていた。鉛筆はいとも簡単に折れる。悲しいくらいに。外を見て空がどうしても視界に入った。

いい引越し日和。

いい見送り日和。

見送りに行きたいけれどどんな顔で行けば良いのか全く分からない。分からない自分に腹が立って、それを考えさせる美しい空にも腹が立つ。

こういうときは私の気持ちを映したような大雨とか、嵐になるのが普通じゃないの。小説ではそうだ。そういう表現がある。

この正反対の空は何。

理不尽な怒りを鉛筆にぶつけていたら、一本の鉛筆が足の小指く

らしいの長さになったので次の鉛筆を出そうとした。が、もうさすがになかった。私は私が出した手紙の、真理奈からの返事を出して眺めた。眺めても気持ちが出まるわけもない。手紙を机に叩きつけるようにひっくり返して文面を隠した。そのとき、薄くて小さい文字が目に入った。最初に読んだときには気持ちが落ち着かなくて気がつかなかったらしい。

「返事待ってます。引越しの日まで」

私は鉛筆を取った。手紙を書こうと思った。ポストにでも入れておけば顔を合わせなくて済むと思った。そして、鉛筆で書きかけたとき、母の昔の言葉を思い出した。

「緑は、別れの色」

私は呟いて、緑色のペンを取った。書き始めようとして、気づいた。もし、仲直りできたなら、これは別れじゃない。でももし失敗したら、別れになる。

私は青い空の写真が背景にうつすらと印刷されている便箋を取り出した。よく考えてみれば、これはよく私の心を映している。「青は悲しみの色」だから。文面は黒のボールペンで、そして、緑のボールペンで四つ葉のクローバーの絵を描いた。もし、これが別れの手紙になったときに麻里奈が幸せになるようにと願うために。そして、勿論ほんの少しの別れの意味もある。

文面だけでなく、便箋で、

「別れは悲しいよ」

と伝えようと思った。きっと伝わらない。でも、やらないと後悔するだろうから、こうした。

私は折った鉛筆をそのままにして家を飛び出した。行き先は、勿論麻里奈の家だ。

檻の中（前書き）

お題は雨と思い出

## 檻の中

鈍色の鉄の棒は少しも傾くことなく、そして曲がることなくまっすぐに立ったまま、私の目の前に立っていた。

しとしとと降る雨が、鉄の棒を濡らし、滴となって地面まで滑り落ちる。

「ここから、出していただけませんか」

隣に仏頂面で立っている飼育員を見上げて、強い声音を叩きつける。飼育員は口を開こうともしなかった。うんざりする。息を吐き出しながら、何かよく分からない物質で造られた壁に背中を押しつけた。

私は、檻の中にいた。

外には、私と同じ「人間」とは思えないような派手で奇妙な色の皮膚をした者や、二、三メートルを超えるような長身の者が列を作っていて、私を覗き込んだり何か機械をこちらに向けてボタンを押したりしている。透明で丸い、レンズらしきものが見えたのでおそらく写真をとっているのだろうと推測。まわりつくような視線を避けるために私は檻の奥にある岩陰に隠れる。そうしていると、緑色の皮膚と白目のないこれもまた緑の目を持つ二メートルほどの長身の飼育員が、檻に入ってきた。そいつはわざとらしく溜息を吐いて私を睨みつけてくる。いつもだ。だから岩陰に隠れるのも考えものだ。

私はここに来て、動物園の動物の気持ちが初めて分かった気がした。

私が連れてこられたのは、おそらく地球の暦で三ヶ月くらい前だろう。一日の長さがどうやら違うような気がするので地面に毎日刻み付ける線もあてにならない。私は「地球という星の人間」という生き物として、この星の動物園に入れられていた。どうして私なの



か分からず毎日苛々。食事は野菜らしきものを生で与えられるときはまだ良いほうで、茶色いかたまりみたいなものを無理やり口に突っ込まれることもあるし、檻の中だって汚い。飼育員が不真面目でなかなか綺麗にしてくれないのだ。毎日同じ服を着せられ、シャワーも浴びることができず、その代わりに頭から冷水を掛けられる。三ヶ月前まで地球で普通の生活　いや、今なら恵まれた生活だと思える　をしていた私にとっては相当な苦痛だった。私の生活を壊したのは、おそらく地球外生命体、つまり宇宙人であるこいつら。どうしてそう判断したかという、空飛ぶ円盤に乘せられてきたから。そんなおかしい話があるわけないと今までは思っていた。が、おそらく、これがUFOというやつなのだろう。そして、ここに住む生き物は人とは思えない肌の色をしているが、二足歩行をし、人間とよく似た形で、しかも喋ったり読み書きしたりすることができ。人間と同じように脳が発達した生物だと思う。宇宙人と言っている。奴らは、普通の高校生活を送っていた私の幸せな生活を奪い去った。部活動を終えて高校から帰宅する私に襲い掛かり、そして連れ去ったのだ。有無を言わさない強引な手口だった。

私は人間として扱って貰えなかった。だが、三ヶ月前までは一人居た。

たった一人。

初めて会ったのは私がここに来てこの暦で三日目の、初めての雨の日だった。この星でも雨が降るのかとぼんやり眺めていると、私はいつの間にかびしょ濡れていた。私の檻には屋根がないので濡れるのは当然だ。隠れるところはあるが、飼育員に睨められると癪なので、食べ終わった餌の皿を頭から被って何とか凌いでいると、例の飼育員に奪い取られた。何か言ったが言葉が分からないので首を傾げるしかない。せめて身体の水滴を拭きとるタオルでも与えられないかなと期待したが、無駄だった。シャワー代わりの冷水をかけられるときは貰えるのに。私はすでに生野菜についた菌で

お腹を壊しかけていた。これで風邪でもひいたら大変だと、緑色の飼育員が去った後、何とか雨を凌ぐ方法を考えるため頭を巡らせた。  
「ここでの生活はさぞ苦しかろうね」

私は耳を疑った。耳慣れないわけの分らない言語の中に、一つだけ聞き取れる言葉があったからだ。地球の言葉で、しかも日本語だった。思わず銀色の柵のほうを見たが、肌の皮膚は見えない。あまりの苦しさに幻聴でも聴いたのかと思ってしっかりしなきゃと心の中で呟く。

「ここだよ」

もう一度聞こえた。そしてもう一度振り返って肌の皮膚を発見した。手のひらだけ肌色だった。あとは真つ青な皮膚をした人だった。体格が地球の人間と同じだったので、私は同じ地球人であると判断し、そちらに這っていつて檻にすがりついた。そして、小さな声で訊ねた。

「地球人ですか？」

「しかも日本人でした」

おどけるように言ったその人は手のひらを全身を覆う漆黒のコートの中に隠した。青色に見えた皮膚は、近くで見ると何かで綺麗に塗られているだけだった。

「地球人が来たって聞いたから来てみたらこんなに可愛い女子高生が連れてこられてたなんて、全く、腹が立ってしょうがないよ」

その人は眉をひそめてはいたが口調は淡々としていた。落ち着いた低い声の男の人だ。

「はい」

唐突に何かが目の前に突き出された。小さな箱と、柔らかいタオルだった。箱には何か書かれていたが何が書いてあるのか読めなかった。ここの言葉のようだ。なかなか受け取らない私に、彼は頬を緩めて、笑った。久々に見た、地球の人間の笑顔だった。

「なあに、毒なんか仕込んでないよ。お腹の薬と、タオル、使いな。お腹痛いだろ？ 寒いだろ？」

別にそのようなことを口走った覚えはないのに、その人は私の今現在の悩みを見事に当ててみせた。私は驚いて、逆に神経質になつてしまう。

「どうしてそんなことが分かるんですか？」

「分かるからさ」

私が箱とタオルを受け取るとその人は踵を返して行ってしまった。それと同時に、飼育員が掃除道具を持って檻の中に入ってきた。私はそばの植え込みにタオルと箱を隠して、いつものように隅のほうにうずくまった。このときばかりはこの緑の飼育員が仕事熱心でなくてよかったと心底から思った。隅々まで掃除をしたりしないため、植え込みの中に隠したタオルと薬箱は見つからずに済んだのだ。掃除が終わって飼育員が去って行つたのを確認してから、私はスカートのポケットに薬箱を忍び込ませて奥の岩陰に入った。水はないので唾で錠剤を飲み下した。あの人は何も説明をしていかなかったのだ、とりあえず一錠飲んだ。薬箱のパッケージにはおそらく使用方法が書いてあるのだろうが私はこの星の言葉は読めない。

また男の人が来たのは雨の日で、私が来てからこの暦で六日目だった。その日も彼は手のひらの肌色を見せて私に合図をした。私は自然に見えるように気をつけながら、その人のそばへ寄る。

「薬は一日何回、何錠飲んだ？」

口を開くなり、焦つたような声音で彼は行つた。「いや、こないだは説明抜きで帰つちまつたからさ……」とそのあとに付け足す。

「一日三回、一錠ずつ食後に飲みました」

その答えを聞いて安心したように、ほっと息を吐いてその人はまた薬を差し出した。

「使ってくれ。ここでもらえるやつはあてにならないからな。前やつた分は俺が持つて帰るからよこせ。それで話があるんだが……」私が植え込みに見物客から見えないように薬とタオルを隠すと、彼は眉間に皺を寄せて呻つた。私は植え込みの中から、汚れたタオ

ルと薬を出して彼に手渡す。

「ここから逃げ出したいとは思わないか……というか、一緒に逃げないか？」

「思います」

答えは自然と口から零れおちた。男は、檻に手をかけ、私を睨みあげる格好になってぼそぼそと言った。

「この奴らは地球の人間を見せ物にしてる。とくに、お前は逃がしてくれないだろうな。女子高生だ。あいつら『地球の日本の女子高生』大好きでな。なんてったって可愛いからだそうだ。だが、その可愛い子もこんな風に檻の中に閉じ込められたら台無しだな。せつかくの制服も汚れちまって……洗濯とかもしてくれないだろう？」

私は泥汚れの目立つ白いセーラーに目を落とした。ひどいにおいがする。だかにおいを消す方法がない。

「飯にもこつちはここに来てやってるんですよ。こんな扱い受けるの、おかしくないですか？ あ、私がブスだからか。」

彼は私の偉そうな物言いに少し口角を上げた。

「あいつらは檻の中の俺たちの気持ちに分からないんだ。分かるうともしない」

「あの……どうして私に親切にしてくれるんですか」

視線を上げた彼の眼光に思わず身体を引いた。彼は檻をひつつかんで狼のように呻った。

「聞いてどうする」

「どうもしません。ただ知りたいだけ」

彼の檻を掴んだ指に力がこもったのが分かった。

「教えたくない」

頑なな言い方だった。今思えば、あれは彼の意地だったのかもしれない。私に、馬鹿にされと思ったのかもしれない。そんなことしないのに。

彼が去ったあと丁度のタイミングで飼育員が入ってきた。

それから雨の度に彼は足を運んでくれた。たった一人の地球人に私は次第に心を許すようになった。彼が来るのは、飼育員が餌を出してから、掃除道具を取りに行くまでの短い時間だった。飼育員が戻ってくると逃げるように帰っていく。少しずつ、いろいろな話をした。ここから逃げ出す壮大な計画の話。地球にいた頃の話。ここがどういうところかという話。そして、その中でこの星では雨が三日に一度降るということ聞いた。つまり、彼は三日に一度この檻にやってきてくれるということだった。彼が来てくれる日は、心なしか気分が軽かった。名前も年齢も分からない、地球の日本人の男は、律儀に三日に一度やってきた。休んだ日はなかった。「どうして雨の日にだけ来るんですか？」と一度だけ訊ねたことがある。「雨の日なら雨の音にかき消されて会話が聞こえないからだ。お前には悪いけど大雨だとなおいい」答えはこうだった。彼と三日に一度のお喋りタイムで、いろんなことを話して、いろんなことを訊いた。とても楽しい時間だった。ただ一つ、訊けないことがあった。それは、どうして彼が青色に右手のひら以外の全身を塗りたくっているのかということだ。奇妙な色の中で、肌色が浮くからか、と予想はしたが、訊けなかった。自分でもどうしてか分からないが、訊けなかった。その謎はすぐに解けた。

「今日、計画を実行する」

計画とは地球に帰る計画のことだ。UFOを使うのだ、ロケットに乗って帰るだの言い争った三日後だった。どちらも非現実的で、とても実行できそうになく、二人で笑い飛ばしていたのに。妙に格好つけた彼がおかしくて忍び笑いを漏らすと、「笑うな」と睨まれた。彼は大まじめだった。それがおかしくてまた笑った。

「できるんですか」

「できる」

根拠もないだろうに力強く彼は頷いた。地球に戻れなくとも、せめてこの檻から出ることができればと思い、私は小さく頷いた。

彼は漆黒の帳が落ちた頃に現れた。ひっそりと静まり返った夜の動物園の雰囲気壊さない、静かな登場だった。私もその彼にならい、すぐ出られるように檻の入り口付近に寄る。夜になると、飼育員が私を檻の中のまたその檻の中に押し込むので、二つ扉を開けないと外には出られない。彼は自分の上着から針金を取り出してピッキングを始めた。

音はかすかだった、はずだ。

が、突然カラフルな宇宙人の飼育員が現れた。彼は振り返ったが、逃げるのは間に合わなかった。後ろからがっちり固められ、身動きが取れなくなってしまったのだ。踵を相手の足の甲にねじ込み、反抗するも無駄だった。

彼は私の前に檻の中にいた人間だったらしい。それが分かったのは、そのときだった。

飼育員の一人が彼をがんじがらめにし、もう一人が彼の手のひらを確認して、何か叫んだ。すると太いロープを持った飼育員が走ってきた。

あの青色は、きっと飼育員の目をごまかすために塗っていたのだ。そして飼育員が来ると逃げるように去るのも、飼育員に見つからないようにするためだったのだ。

縄で縛られるときに、足掻きながら彼は叫んだ。飼育員のわけの分からない言葉の中に混じる、私の知っている言葉が悲しかった。

「また俺をあゝ檻の中に入れるのか」

いつも落ち着いていた声が少しだけ震えていた。怯えていたのか、それとも悲しんでいたのか分からない。

飼育員たちはその声を無視した。私はやめたと叫んだ。何度も叫んだ。十回叫んだ。檻を握り締めて百回叫んだ。

だが伝わるはずもない。あいつらに私たちの言葉なんて届かない。だってあいつらは理解しようとしていない。私たちの言葉を、心を。彼は舌を噛み切って死んだ。檻の中に入ることより、死を選んだ。

その日も雨だった。私と彼の心を表すかのような、車軸を流すかのような雨が、地面を強く叩いていた。

私は今日も雨を見る。楽しかったはずの三日に一度の雨が、いまではもう、あのときの彼の声を思い出させるものでしかない。私は柵を握り締めて、遠くを眺める。この柵を越えてもこの星から出られないことは分かっている。それに、私が逃げたらその代わりに、次のこの檻の住人が地球から連れてこられる。そしたら私はまたこの檻に来よう。あの人みたいに。病気で弱って死ぬよりは有りもしない希望にすがって誰かを助ける努力をしてから死ぬほうがよっぽど幸せに思えた。

ねえ、あなたもそうだったんですか。

口の中に入ってくるしょっぱい雨を嚥下して、いもしない相手に問いかける。

## 思い出（前書き）

テーマは初夏と情熱。



## 思い出

私は運動がとことんできなかった。何のスポーツをしても周りの人たちに迷惑をかけるばかりで、いつも肩身の狭い思いをしてきた。

今から三年と少し前くらいのことだろうか。私は中学校の下駄箱前に置かれた木製の箱の前でまだ、入部届けを出す勇気が出せずにいた。私の入部届けには陸上部、と書いてある。その日は最終日だったし、字はボールペンで書いてあったので今更他の部に変えられるというわけではない。だが三年間の中学校生活を決めると言っても過言ではない大切な部活動だ。迷う。見学には一度だけ行った。友達に誘われたのだ。気の小さい私はそれ以降、見学に行っていない。もっと他の部活も見えておけばよかったのだろうが、私は練習中の先輩たちに「見学いいですか」と声を掛けることができないほど小心者だった。誘い合って入れる友達もいないし。

結局、私は陸上部、と書いたままその紙を箱の中に落とした。

初めて部活に行ったのは入部届けを出して3日目くらいのときだった。先輩たちは親しみやすい明るい人たちばかりだったし、優しくかった。でも私は自分から話しかけることもできなくて、その上に同級生と馴染むこともできなかった。よく、試合の日にああ一人ぼっちだと一人で嘆いて、学校で場所取りしていたブルーシートの上にうずくまた。誰も相手にしてくれないとかそんな悲劇のお姫さまぶってみたりした。私は短距離に入ったのだが、それでも練習はきつい。夏休みにはきつい練習のあとでみんなでカレーを作ったりした。本当に楽しかったのかはよく分からない。愛想笑いばかり浮かべていた気がする。

部活はきついばかりだった。だが、やめる勇気が私には欠けていた。だから、もやもやした気持ちを抱えたまま、二年生になった。

二年生になると、仲のよい友達がようやくできて、後輩もできて、きつい練習をようやく耐えられるようになった。私は弱いから、一緒に頑張る仲間がいないと走れない。そんな仲間たちと、朝の自主練をはじめた。朝早く起きることなんてみんながいないとできなかった。私は半ば意地みたいな感じで必死に練習した。私は賞なんてとれないからとにかく自己ベストを目指してひたすら。どんなに遅い奴でも速くはなりたいたんだ。でもどんなに練習しても私は遅かった。後輩たちにも抜かれて、悔しいというよりも情けなく思えた。でも、一つだけ、私には特技があった。陸上競技に役に立つもの。それは、声。

私は内気でインドア派のくせにいらなくらい声が大きかった。だから掛け声をかけたりするときもよく響いていた。

三年生になって中総体の時期が近づいてきた。中総体の前後は梅雨にかかるので雨が多くなる。たしか、一年生のときの中総体も雨だった。私たちにとって最後の中総体。走りこみの時期を終えた中総体2日前、私は足を怪我した。リレーの練習のときだった。

いつものように「行きまーす」「はい」の掛け声の後、私は次の走者にバトンを渡すべく、全力疾走した。リレーの練習のときは本番にバトンがあわなくなることを防ぐために全力で走らなくてはいけない。そして、スピードが出てきたそのとき、目の前を黄色のテニスボールが転がっていった。思わず声を上げて、私が咄嗟に取った行動は止まることだった。後で思えば飛び越えて進むこともできたのかもしれない。だが、私はそんなことを考える余裕がなかった。止まったときに、右の太ももに痛みが走った。陸上を始めてから、最初で最後の怪我だった。

ボールはテニス部のものだった。私たちの中学校の運動場は放課後になると、サッカー、ハンド、野球、テニス、そして陸上の多くの部活でこった返す。陸上部はどうしても球技系の部活の周りを走らなければいけなくなるので、ボールが飛んでくることは多い。ジ

ヨグの途中にサッカーボールが飛んできたり、スタートの練習をしていたらハンドボールが飛んできたりといった具合だ。殊に、テニスボールは小さくて多いので拾うのが間に合わず、放置されたままのことがよくあり、陸上部員はその大量のボールをどけてから走るのが常だった。危ないとは思っていたが、まさか自分になるとは思っていなかった。

最後だからということ言い訳にし、病院にはいかなかった。中総体後に行くと「軽い肉離れですね」と言われた。よく走れたものだと思う。私は200mと100mと4×100mRに出場した。200mは大失敗で、悔しくてぼろぼろ泣きながら走ったが、100mは自分のシーズンベストが出せた。問題は、四人で走るリレーだけで、しかもこれが一番最後だった。

もしかしたら走れなくなるかもしれないからと、アップは少なめにして、本番にかけた。幸い、私は第一走者だったのでバトンあわせは少なくてすんだ。

赤いタータンを眺めていた。夏になると、これがやけどするくらいに熱くなったんだっけ、と心の中で呟く。夏の暑い中できつい練習をして、そしたら、先生がかき氷を買ってきてくれて、それを見んなで食べた。冬は、雪が口の中に入るのも気にせず、エンドレスリレーをした。あり得ないとかみんなで喚きながら。きつかったけどまだ覚えてる。きつい練習ほどよく頭に残っている。楽しいことは忘れてしまうのに。人間の記憶力は残酷だな、と思って目を伏せる。これで最後だ。

学校名が呼ばれて、バトンを上げてお辞儀をした。三年間で染み付いた一連の動作もこれで最後。

「位置について、よいい」

雷管の音が響いた。押して押して押して　コーチが言っていたことを思い出し、地面を押す。押す。押した分だけ、赤いタータンは押し返してくれる。タータンを走るのは気持ちがいい。早くなっ

た気がする。ただけだ。カーブを身体を内側に傾けて、走って、最後だ。なのに。

第二走者が走り出した。私と一緒に練習してくれた子だ。彼女がいなければ私は走れなかった。その子の背中が遠くなる。緑の三角が見えた。このままじゃバトンゾーンを出る。

「待つて!!」

止まってくれた。彼女の手にバトンを押し付ける。

ごめんなさい。私はやっぱり最後まで迷惑かけました。

やっぱり運動なんてできなかった。荒い息のままタータンにへたり込みそうになったが、膝に手について踏みとどまる。その後のリレーは見る事ができなかった。視界がぼやけて、見えなかった。私はふらふらとテーピングを外しに向かった。最後の中総体に使ったテーピングはいつもの寂しい白ではなく、カラフルな色ペンでメンバーの名前と学校名が書かれ、飾られた特別仕様だった。

私の任務が一つ、残っていた。それは、連呼の音頭を取ることだ。ようやく涙を拭いた私は、いつも連呼をする場所に向かった。私の声はいつもより大きくなる。自分の悔しさも込められて。私ができることはこれだけだから。

一つ、そうなって気づいたことがある。先輩たちには声が裏返るほど必死に応援する人がいた。それは、自分たちも悔しい思いをしたからなんじゃないだろうか、最後の最後になって思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8123s/>

---

てのひら

2011年7月19日03時22分発行